
一真紅の魂一

エビフライ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

― 真紅の魂 ―

【Nコード】

N1823K

【作者名】

エビフライ

【あらすじ】

ヤンチャな少年は立派な大人になり、旅へ出た。年月を経て、その魂を受け継ぐ者が現れる……

この小説はアニメ遊戯王GXを基準（LP4000、表側守備0K）とし、禁止制限はOCGのものを使用します。勝手な設定でシンクロ召喚も存在しますが、ご了承下さい。

第1話 魂の後継者（前書き）

初投稿です。ハイ。

お見苦しい点もあるかもしれませんが、――真紅の魂――をよろしくお願ひします。

それでは、ごゆっくりどうぞ。

「「「デュエル！」」」

第1話 魂の後継者

「クロノス臨時校長〜!!」

縮れ毛の男が走りながら言った。

呼ばれたようである金髪の男は急に振り返り、独特な口調で言う。

「もう、臨時〜じゃないノーネ!! 今年からはクロノス”校長”なノーネ!!」

「…スンマセン」

そんなに怒るか?と、不満を持ちながらも男は謝った。

「それ〜で…何かあったノーネ?」

クロノスと呼ばれた金髪は縮れ毛に対して聞く。

「ああ、ハイ。受験番号110番が電車の事故で遅れたみたいなんすけど…」

「また110番なノーネ…」

クロノスはうんざりした様子で言った。

「また？」

男の疑問はスルツと口から出た。

「いやいや、コッチの話なノーネ。」

クロノスは誤魔化し、答えようとはしなかった。

「で、どうしたらいいんスカ？」

縮れ毛の男は本題に戻って聞いた。

クロノスは咳払いをすると、遠くを見つめて言う。

「たとえば、どんな生徒であつても、平等に扱うつ……それが教育者の務めな……」

『アルティメットパウーンド！！アルティメットパウーンド！！』

突然、クロノスの声が流れだした。

「誰なノーネ、人がキメている時に……とにかく！ちゃんと試験を受けさせるノーネ！」

「…校長、えつと…その…声？はなんなんスか？」「電話に決まってるノーネ。もしもし。」

クロノスは話ながら向こうに行ってしまった。

…悪趣味だ。縮れ毛の男はそう思いつつ、受験番号110番の所へ向かった…

海馬ドームの入口では、一人の少年が同じ所をグルグルと回っていた。

「どうしよう、これで試験受けらんなかったら…」

少年の脳裏に嫌な流れが浮かぶ…

< 中学で浪人↓学歴社会に飲み込まれる↓まともな仕事につけず生活苦↓振り出し（天国）へ戻…る…>

「うわあああああ！……！」

少年は突然叫んだ。周りの視線が集中する。

「まずい、まずいまずいまずいマズイイー！！高校には入らないと！」（こうなったら……祈るしか道は無い！！）

ブツブツブツブツブツブツブツブツ…

叫んだかと思えば、急に何か唱え出す少年に、周囲の視線は釘付けだった。

「受験番号110番！」

ブツブツブツブツブツブツブツ…

「受験番号110番！！！」

ブツブツブツブツブツブツブツ…

「、（*、D）ノ」

少年の体は宙に舞った…誰よりも華麗に、誰よりも遠くへ…

「テメーを呼んでるんだよチビクソボウズ！！！」

少年にドロップキックのプレゼントをしたあと、縮れ毛の男は叫んだ。

「何すんだよ！！オレはチビじゃない！！160、072センチもあるぞ！！」「…それを世の中じゃチビって言うんだよ。」

あきれたように男は言う。

（何でそこまで数値が細かいんだ。）

縮れ毛の男は心の中でツツコミをいれろと、少年の襟の後ろを掴み、ズルズルと引きずっていった。

「どこ行くだよ！はーなーせー！！」

少年はバタバタと暴れるがびくともしない。

「オレは試験に合格しなきゃならないんだよ！離せよクソワカメ！！」

パッ

突然、男の手が離れた。少年は床に背中を打つ。

そして、男は少年に顔を近づけ言った。

「クソワカメじゃねえ、堂林康平だ。チビクソボウス。」少年はそれを聞くと笑って言い返した。

「へっ、チビクソボウスじゃねえ、伴遊真だ。クソワカメ!!!」

遊真の眼は真っ直ぐに堂林を見据えていた。

…まるで一步も引く気は無いと訴えるように。

数秒の沈黙の後、堂林が口を開いた。

「…おもしれえ奴だ。ドン底の110番から合格か……最高の万馬券じゃねえか!!!」

… 堂林も笑っていた。

堂林の言う通りで。受験番号は筆記の成績順になっており、遊真は110番目。つまり、ほとんど合格の目は無い…

「その万馬券買ってやる！ここを真っ直ぐ行けば試験場だ。走れ！チビクソボウズ！！」

「伴遊真つつてんだろ！クソワカメ！！」そう言って少年は試験場へと走っていった…

――――

試験場へ出た遊真の目に入って来たものは、眩しい照明、広いデュエルリング、ギャラリーにはすでに試験を終了した受験者たち。

「スゲーな、ドキドキしてきたぜ。」

遊真は興奮を隠せず、激しく足踏みをする。

「受験番号110番か？早くリングにあがりなさい！」すでにリン

グ上にいる試験官が言う。

「ハイ！試験番号110番、伴遊真です！よろしくお願いします！
！」

遊真はリングに駆け上がると、ドーム全体に響きわたるほどの大声で返事をした。

「よし、試験開始だ！」

「デュエル！！！」

遊真LP4000VS試験官LP4000

「おーおー、始まったか。」

堂林はすでに二階のギャラリーで観戦している。

「さっきの大声はなんなノーネ？」

電話をしていたクロノス不思議な顔をして戻ってきた。

「ああ、さっき言った110番の受験生ですよ。あいつ、チビだけと見どころありま……校長？」

「あ、アレは…」

クロノスは上の空で堂林の言葉は届いていないようだ。…その視線は遊真に注がれている。

「先攻はキミからだ！」

遊真の先攻でデュエルは始まった。

「オレのターン。ドロー！」

勢いよくデッキからカードを引く。

「オレは《E・HEROクレイマン》を守備表示で召喚！ターンエンドだ！」

E・HEROクレイマン攻800守2000

「E・HERO…ドロップアウトボーイ…」

クロノスは遊真の場に現れた岩のようなモンスターを見てそう呟いた。

「どうしたんスカ！？クロノス校長！校長！」堂林たちを置いて、デュエルは進行する。

LP4000

手札5

クレイマン

「私のターン。ドロー！」「私は《俊足のギラザウルス》を攻撃表示で特殊召喚！」

俊足のギラザウルス

攻1400守400

「特殊召喚？」遊真は首をかしげる。

「《ギラザウルス》は召喚を特殊召喚扱いにする事が出来る！更に、《ギラザウルス》をリリースして、魔法発動！《大進化薬》！」

「な、なんだこれ？」場にカプセル状の薬が落ちてきた。

「《大進化薬》は恐竜族モンスター1体をリリースして発動、3ターンの間、場に残り続ける。そして…」

《大進化薬》が場にある限り、恐竜族モンスターの召喚にリリースは必要なくなる！」

「なんだって！？」

「私はまだ通常召喚を行っていない…リリースを無視して、《暗黒ドリケラトプス》を攻撃表示で召喚！」

暗黒^{ダーク}ドリケラトプス

攻2400守1500

「バトルフェイズ!《ドリケラトプス》で《クレイマン》を攻撃!」

「くっ!!」

遊真LP4000↓3600

遊真のLPが400ポイント削られた。

「な、なんでダメージが…」

「《ドリケラトプス》は攻撃力が守備力をこえていれば、その数値分、ダメージを与える!」

私は……このままターンエンドだ。」

LP4000

手札3枚

ドリケラトプス

大進化薬、

「やっぱり万馬券は万馬券…か。」

堂林が呟く。

「あれは確か…5年前の卒業生のデッキサンプルだったな。あの

チビ、身長もなけりや、運も無いな。」

デュエルアカデミアの実技入学試験は、事前に対策出来ないように6〜7種類のデッキからランダムに相手が決まることになっている。堂林は手元の資料に目を落とす。

「今日、あれに勝ったのは…1人だけ…か。」

「へえ、あんたやるな！オレのターン！」

遊真は叫ぶように宣言する。

（オレの手札に攻撃力2400に対抗出来るモンスターは居ない…なら！）

「魔法発動！《魔の試着部屋》！LP800を支払い、デッキの上から四枚めくる。

その中のレベル3以下の通常モンスターを特殊召喚！」

場に赤いカーテンの円形試着室が現れた。

「1枚目！《はにわ》！守備表示！」

「2枚目！《アーメール》！守備表示！」

「3枚目！《ドローン》！守備表示！」

「4枚目！《ランドスターの剣士》！守備表示！」

次々とカーテンの裏からモンスターが出てくる。

はにわ（通常モン）

攻500守500

アメール（通常モン）攻700守1300

ドローン（通常モン）

攻900守500

ランドスターの剣士（通常モン）

攻500守1200

（よし！これでなんとか……。）

「永続魔法《凡骨の意地》を発動し、ターンエンド！」

遊真LP2800

手札4

はにわ、アメール、ドローン、ランドスターの剣士

（全てモンスターカードか……。引きが強いな。）

試験官は手札を確認し、笑みを浮かべる。

（壁モンスター4体…だがコイツの前では無力だ！）

「私のターンだ。」

手札から《究極恐獣》をリリースを無視して召喚！」

《究極恐獣》（アルティメットティラノ）
攻3000守2200

「攻撃力3000!？」
「更に、手札からフィールド魔法、《ジュラシックワールド》発動
！」

フィールドが木々に囲まれていく。

「《ジュラシックワールド》の効果、場の恐竜族モンスターの攻守
を300ポイントアップ！」

《ドリケラトプス》
攻2400↓2700
《究極恐獣》
攻3000↓3300

「ヤバイ!」「バトルだ!」
《究極恐獣》で《アーメール》を攻撃!」

《アーメール》は突進を受け、破壊された。

（次の《ドリケラトプス》の攻撃を受ければ貫通ダメージはあるけど、モンスターは2体残る!まだ勝機はある!）

しかし、遊真の思考に反して究極恐獣がまた突進してくる。

「え!？」

「《究極恐獣》は、場の全てのモンスターに攻撃しなければならない
い!」

究極恐獣は次々と遊真のモンスターに突進していく。

「《はにわ》、《ドローン》、《ランドスターの剣士》、撃破!」

「そんな!？」

「そして、キミの場はがら空きだ。《ドリケラトプス》でダイレク
トアタック!」

遊真LP2800↓100

「ターンエンドだ。」LP4000

手札2

ドリケラトプス、究極恐獣

ジュラシックワールド、大進化薬(2ターン)

(やはり、このデッキは入学試験レベルには強すぎる。…この少年
にもう戦意は無い…)

「オレのモンスターが1ターンで全滅…」

遊真は俯き、震えている。

「先生…もう…」

（やはりな…）

「もう…」

「燃うえて来たああ！！！！！！！！」

「！？」

「先生！！オレはまだ諦めちゃいない！」少年は屈託なく笑う

（LP4000対100だぞ！何故まだ笑える！？既に負け試合じゃないか！）

「やつぱりな……あのチビの眼は”逃げる””退く”なんざ見えてねえ眼だ……」

「オレのターン！ドロー！！」

「意識の限り戦い続けるバカの眼をしてやがる！」

「永続魔法、《凡骨の意地》の効果！ドローフェイズにドローしたカードが通常モンスターだった場合、もう1枚ドローする！」

（手札補充か……）

「オレがドローしたのは…通常モンスター《E・HEROスパークマン》よってもう1枚ドロー！追加ドローも通常モンスター《きのこマン》、もう1枚ドロー！通常モンスターカード《E・HEROバーストレディ》、

ドロー！モンスターカード！

ドロー！モンスターカード！！

ドロー！モンスターカード！！！！」

（一体何枚引くんだ！？）

遊真の異常なまでの手札補充。ギャラリーからは”もうやめて”という声もあがる。

「これで手札は11枚、さて、あのチビは何をすんのかねえ。」

自分の手札を見て、遊真は笑って言う。

「オレの反撃はここからだぜ！先生！

手札から魔法発動！《融合》！《E・HEROフェザーマン》と《E・HEROバーストレディ》を融合し、《E・HEROフレイムウイングマン》を攻撃表示で特殊召喚！」《E・HEROフレイムウイングマン》
攻2100守1200

「更にもう1枚、《融合》！場の《フレイムウイングマン》と手札の《スパークマン》を融合！

こい！《E・HEROシャイニングフレアウイングマン》！！！」

《E・HEROシャイニングフレアウイングマン》

E・HEROフレイムウイングマン+E・HEROスパークマン

攻2500守2100

「…手札補充からの《融合》による融合モンスターの召喚…

たしかに見事な流れだったが、その攻撃力ではまだ私のモンスターには及ばない！」

「……まだ、《シャイニングフレアウィングマン》の効果があるぜ！墓地のE・HERO1体につき、《シャイニングフレアウィングマン》は攻撃力を300ポイントアップ！オレの墓地には5体！よって、攻撃力1500ポイントアップ！」
シャイニングフレアウィングマン
攻2500↓4000

「こ、攻撃力4000！」

「バトルだ！《シャイニングフレアウィングマン》で《究極恐獣》を攻撃！」

試験官

LP4000↓3300

「《シャイニングフレアウィングマン》の効果！戦闘で破壊し、墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「ぐわっ！」

LP3300↓300

「まだまだあ！速攻魔法《融合解除》！《シャイニングフレアウィングマン》の融合を解除して、《フレイムウィングマン》と《スパークマン》を場に戻す！」

E・HEROスパークマン（通常モンスター）

攻1600守1400

「だが、そのモンスターでは、《ドリケラトプス》は倒せないぞ！」

遊真は笑って言った。

「これで終わりだ。先生。」

「手札から、速攻魔法《突撃指令》を発動！」

フィールドの通常モンスターを1体選択、そのモンスターをリリースし……

相手モンスター1体を破壊する！」

「なに！？」

「《スパークマン》をリリースし、《ドリケラトプス》を破壊する！」

スパークマンが消えると同時に、ドリケラトプスが爆発した。

「ああ！《ドリケラトプス》！」

「……まだ、《フレイムウィングマン》の攻撃が残っているぜ！フレイムシュート！」

フレイムウィングマンの右腕から放たれた炎は試験官へ直撃した……

試験官

LP300↓0

「…おめでとう、キミの勝ちだ。」

遊真は両手を天に突き上げ、叫んだ

「よっしゃあ！完全燃焼！」

「まじかよ…あのチビ勝っちまった…！？」

（カードの知識はねーけど、あのプレイング…）

「シニョール十代が帰ってきたノーネ…」

隣のクロノスが突然呟いた。

「は？誰だよソイツ。」

「過去にアカデミア最強のデュエリストがオシリスレッド寮だった

事があるノーネ…。

それが、E・HERO使い遊城十代。彼と瓜二つなノーネ…」

「へえ」

（最弱の寮の最強デュエリスト…のそっくりさん…か、もしかしたらこのチビなら、あのカードを…）

「ところで…」

クロノスはこちらに向き直り、言った。

「何だよ？」

「さっきから若手教師が校長に対して、”誰だよ” ”何だよ” とはどういう言葉遣いなノーネ！」

（やべっ、つい…）

「罰として、今日は私の仕事を手伝うノーネ！覚悟するノーネ！」

「……チクショー……あのチビのせいだー！」

伴遊真

- 入学試験 -

…合格

第1話 魂の後継者（後書き）

お楽しみ頂けましたでしょうか？

ちよつとありきたりだったかもしれないね。スンマセン。

感想、改善点、誤字脱字、要望などございましたら、気軽に書き込んで下さい。

次回もよろしく願います。

第2話 出会い（前書き）

くあらすじく

縮れ毛教師堂林と出会い、無事に実技試験に勝利した遊真。しかし、
出会いはそれだけではなく…

第2話 出会い

「試験は終了だ。入口までの戻り方は…」

「分かってます！大丈夫です！」

遊真は即座に返事をした。

『あーあ、オイラを使わないからこんなに苦戦して。』

何かがデュエルリングを降りようとした遊真に話かけた。

「ギゴバイト…。そんなにすねるなよ。」

遊真の肩には頬を膨らませたギゴバイトが座っている。他の人には見えていないようだ。

『いいよ、いいよ。どうせオイラは数合わせのザコカード…。』

「そんなことは無い。オレのデッキの1枚1枚は大切な仲間さ。ザコカードなんかじゃないぜ。」

『ゆづま…』

ドンッ

ギゴバイトと話していた遊真は、前から来る長髪の少年に気付かずに、リングから数メートルでぶつかった。

「痛っ、悪い！ちよつとよそ見してて…」

「…邪魔だ。雑魚が。」

「え！？」

遊真の脳内で言葉が繰り返される。

…ジャマダザコガ

「テメエ！もう一度言ってみろ！」

「邪魔だ、チビ。」

長髪の少年は振り返らずに言った。

「テ・メ・エ」

遊真を無視して、少年はデュエルリングに登っていった。

「何だよ！オレの後ってことは、オレより成績悪いじゃないか！」

「それは違うよ。」

「えっ！？」

遊真が振り向くと、後ろに今度はショートカットの女の子が立っていた。

きれいな肌、すっきりした目鼻立ち、美しいスタイル、まるで短髪のブラマジガールだ。

少女はツカツカと近づいて、右腕を伸ばすと、

…遊真の頭を撫で始めた。

「あー、やっぱり小さくて可愛いー！」

「チビ扱いすんなあ！」

遊真の反応を見て、少女は笑って謝った。

「ゴメンゴメン。…でもさっきのキミのデュエル、凄かったよ！」

少女は目を輝かせて言う。

「あ、ああ。どうも……じゃなくて……！」

さっきの”それは違うよ”ってどういう事だよ！」

「…そのままの意味、彼は五十嵐一希いがらしかずきデュエルアカデミア中等部に所属していて、デュエルモンスターズ全日本大会中学生の部の優勝者。勿論、中等部トップ。」

「全日本大会優勝者……ちょっと待てよ！中等部トップだったら入学試験要らねえじゃねえか！」

遊真は少女に歩み寄って尋ねる。

「そうなんだよね。まあプライド高そうだから、実技試験を腕試しって考えてるんじゃないのかな？」

「腕試し……か。」

ワアアアアア！！

突然、大歓声があがる。

「あいつスゲーぞ！2人しか勝ってない恐竜族デッキにワンターンキルだ！！」

「しかもノーダメージだぞ！！」

「なに！？」

周りの話が聞こえ、遊真は驚きの声をあげる。

「あちゃー、見逃しちゃったか。まあいいや！キミと話が出来たしね！ハイ！」

そう言って少女は遊真に紙を手渡した。

「何だよ、これ？」

「私のケータイ番号！」

少女は笑顔で答える。

「いいのか？今会ったばかりだぞ。」

「いいよ！キミは悪い人じゃ無さそうだし、何より可愛いから！小さな…」

おっと！これはNGだったね。」

少女は遊真の禁句に気づき、言葉を口に留めた。

「つーか、オレ、お前の名前知らないぞ！」

「おお！これは失敬！

私は桜井ひなた（さくらい）花の桜に井戸の井、ひなたは平仮名！」

遊真は頷き、答える。

「分かった。よろしくな！ひなた！オレの名前は……」

「伴遊真くん！だよね！」

遊真よりも早くひなたが答えた。

「な、何でオレの名前を？」「いやー、キミが試験前にあんな大声で自己紹介するとは思わなかったよ。多分、みんなキミの事を知ってるよ！」

あつ、外に親を待たせてるんだった！じゃあね！今度はアカデミアで！」

ひなたは笑顔を残して走っていった。

「…オレも帰らないとな。行こう！ギゴバイ…ト？」

ギゴバイトは肩にはおらず、床に突っ伏していた。

「どっした！？ギゴバイト！ギゴバイト！」

『オイラ邪魔って、雑魚って、チビって言われた……。』

ギゴバイトは俯き、落ち込んでいる。

「それかよ……お前に言ったんじゃ無いぞ、多分だけど。」

『…本当？…そうだね、やっぱり全部チビの遊真に言ったんだよね！そうだよ！オイラ元気出すよ！』

「”やっぱり”の所がムカつくな。まあいいや、帰ろう！」

遊真は無事に帰路に就く……

ハズだった。

「うわー！戻り方忘れた！……くそ、ちゃんと聞いておくんだっ
た！」

遊真が見回りの警備員に保護されたのはそれから8時間後の事だった。

――――

3週間後INデュエルアカデミア

入学式も終わり、遊真は正式にアカデミアの生徒になった。

もちろん、筆記試験最下位の遊真は…

「オレはオシリスレッドか…。」

アカデミアから歩いて10分、レッド寮が見えてきた。一言で言う
と…

『ボロアパートだな。』

「イヤか？ギゴバイト、オレは結構好きだぜ、こついうの。なんて
いうか…ほら、風情を感じるじゃん！」

「オレは去年もここに住んだが一切感じなかったぞチビクソボウズ。」

「げっ、クソワカメ。」

後ろから堂林が現れた。

「堂林先生様、と言え。いいから、荷物置いてこい。新入生歓迎会があるからな。…ああ、チビ、お前の部屋は二階の一番左だ。」

堂林は指をさして言う。

「チビって呼ぶな！……何でワカメがオレの部屋の場所知ってるんだよ。」

遊真は怪しいものを見る目で堂林を見つめる。

「言っただろ、”去年もここに住んだ”って、今年もオレがレッド寮の寮長だ。そして、寮長の命令は絶対だ。早速だ。もうワカメって呼ぶな。」

「はいはい。」

遊真はそう言って寮の階段を駆け上った。

（…従う気無いだろあのチビ。）

「二階の一番左と、ここだ。」

遊真は勢いよく扉を開けた。中では既に本の整理をしている1人の男子がいた。眼鏡に短髪のごくごく普通の男子だ。

「あ！あの小さい伴遊真くん！僕、ルームメイトのきんぐかいり如月海里です。よろしく。」

（ひなたの言ったとおり結構オレの名前知られてるみたいだな。…でも）

「あの小さいって付けんな！…まあ、いいや。よろしくな！海里！ところで…それ、何の本だ？」

海里の持っているドス黒い本を指差す。

「これ？『デュエルアカデミアの七不思議』だよ。」

そう言つて遊真に表紙を見せる。確かに白い文字でそう書かれている。

「七不思議…アカデミアにはそんなものもあるのか。」

「うん。僕はアカデミアの不思議な出来事を調べたいから、入学したくらいだしね。デュエルモンスターの精霊世界の入口がある、とか。七不思議じゃなくても、数年前、世界を破滅させるほどの力を持ったカードがアカデミアに封印されたって話もあるしね。」

海里は楽しそうに語る。

「世界の破滅ねえ、オレには考えられないぜ。」

「チビ！海里！歓迎会だ、早く来い！」

堂林の怒鳴り声が聞こえる。

「行こうぜ！海里！」

「うん！」

2人は立ち上がり、急いで出て行った。

そのカードが遊真たちに大きく関わる事になるとは、まだ知る由もなかった…

第2話 出会い（後書き）

ストーリー上デュエルを挟みませんでした。申し訳ない…。

次回はデュエルです！

これからもー真紅の魂ーをよろしくお願いします。

第3話 補習？（前書き）

みなさん、こんにちは。エビフライです。

前回書いた通り、デュエル回です。

じゅっくりびっぞ。

第3話 補習？

遊真たちが入学して早一週間が経った。

「えー！補習！？

何でだよ、ワカメ！！」

2人だけの教室に遊真の声が響く。

「入学直後のテストが全部赤点なんだよ！まだ中学の範囲だろうが！チビ！」

堂林が強い口調で言った。

「そ、それは…」

遊真には返す言葉もない。

「オレは一応、レッド寮の寮長だからな。生徒の成績も考えねーといけねー。だから補習だ1ヶ月。」

「い、いつかげ…。マジかよ…。」

それを聞くと遊真はガツクリとうなだれた。

「まあ、オレも鬼や悪魔じゃない。お前にチャンスをやろう。」

堂林は近くのプリントに手を伸ばしながら言った。

「チャンス!？」

「ああ、明日にもう1度テストをする。その点数によっては、補習を1週間にでも、1日にでもしてやろう。」

その一言で、遊真の目に光が灯った。

「よっしゃ、燃えてきたー!!目指せ100点!」

「とは言っただけど…
全然分かん。」

遊真は部屋の机に向き合い、ため息をつきながら言う。

「海里、勉強教えてくれよ。」

熱心に本を読む海里に話しかける。

「無理だよ。僕が教える事が出来たら、今頃ラーイエラーにいるよ。」

「だよなあ……」

遊真は椅子を傾け、天井を見て呟く。

「全部ひらがなのテストだったら完璧なのになあ……。」

(…平仮名?)

「そーだ!! ひなたに聞こう!!」

遊真は突然立ち上がり言った。

「ひなた” って桜井さん？」

「ああ、そうだよ。入学試験のときに会ったんだ。あいつならきつとオレより頭いいだろ！」

遊真は急いで、携帯のボタンを押す。コール音が流れる。

「って、海里、何でひなたの事知ってた？」

「当然だよ……」

呆れたように海里は言う。

ガチャ

「もしもし、桜井です。」

「桜井さんは入学試験1番なんだから……」

「あつ、遊真だけど……今お暇でいらっしやいますか？ひなた様……」

――――
10分後、レッド寮

「……で、私に勉強を教えて欲しい、と。」

ひなたは事情を聞くと、すぐにレッド寮まで来た。

「その通りです。お願いします。ひなた様。」

遊真はもはや土下座してしる。

「いいよ！全然！

…その代わり、様付けやめて、私とデュエルして、遊真。」

ひなたは笑って答えた。

「…それでいいのか？」

「うん、それだけ。」

それを聞くと、遊真はデュエルディスクを持って外に飛び出していた。

「桜井さん、本当に良いんですか？」

外へ出ようとするひなたに海里が尋ねる。

「へへ、海里くん、面白いものを見せてあげる。」そう言って、ひなたも外へ出て行った。

「面白いもの…？」

快晴の空の下、レッド寮の前で向かい合う遊真とひなた。準備は出
来ているようだ。

「入学試験1番が相手か、燃えてきたぜ！ひなた！」

「遊真…手加減は要らないよ。全力で来て！」

「「デュエル！！！」」

ひなたLP4000

遊真LP4000

「私の先攻、ドロー！」

（私の見た限り、遊真のデッキはローレベルの通常モンスターとE・
HERO…）

「私は《トイマジシャン》を攻撃表示で召喚！」

《トイ・マジシャン》

攻1600守1500

場にオモチャの魔術師が現れた。

（属性もバラバラで一見共通点はない…）

「リバースカードを2枚セット！」

（でもね、戦い方に大きな欠点がある…）

「手札からフィールド魔法《魔法族の里》を発動！」

周りからは大木が伸び、光が差し込む森となった。

「《魔法族の里》の効果は、魔法使い族が私の場にだけ存在する場合、

遊真……あなたは魔法を発動することが出来ない！」

「え！魔法が！？」

「その代わり、私の場に魔法使い族が存在しなければ、私は魔法を発動出来ない。ターンエンド！」

ひなた

LP4000

手札2

《トイ・マジシャン》

伏せ2

「オレのターン！」

（マズいな…魔法って事は《融合》も使えないぞ…）

遊真は手札を見て考える。

（悩んでるね、遊真。

そう、遊真の弱点は魔法依存。通常モンスターだからモンスター効果で《魔法族の里》は破壊出来ない。ローレベルだから、魔法サポート無しでの戦闘は難しい。と、なると…）

ようやく遊真の手が動いた。

「こい！《ギゴバイト》！攻撃表示！」

『やっと、オイラを出したな、ゆうま！』

《ギゴバイト》

攻350守300

「リバースカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

（そう、魔法が使えない今、遊真に残された手段は…トラップカード！）

遊真LP4000

手札3

《ギゴバイト》

伏せ2

「私のターン！ドロー！」

「よし！この瞬間トラップ発動《玉砕指令》！レベル2以下の通常モンスターを選択する。指定したモンスターをリリースし、相手の魔法、罠を2枚まで破壊！」

『ゆうまゝ！！オイラを捨てる気か！？』

ギゴバイトは涙目で遊真に訴える。

「しょうがないだろ！魔法が使えないんだから！」

（やはり狙ってきたのは罠での《魔法族の里》の破壊…）

「させない！カウンター罠《盗賊の七つ道具》！LP1000を支払い、罠カードの発動を無効にする！」LP4000↓3000

《玉砕指令》は効果を発動出来ずに消えていった。

「《玉砕指令》のリリースは効果発動時だ《ギゴバイト》は場に残るぜ！ひなた！」

『ありがとう、ひなたさ〜ん』

「バトルフェイズ！」

《トイ・マジシャン》で《ギゴバイト》を攻撃！」

『ええ！？結局！？』

「させないぜ攻撃宣言時、永続トラップ発動《窮鼠の進撃》！レベル3以下の通常モンスターのダメージステップに100の倍数のLPを払い、その数値分、相手モンスターの攻撃力を下げる！」

「無駄！カウンター罠《魔宮の賄賂》！魔法、罠の発動を無効にして破壊！そして相手…遊真はカードを1枚ドローする！」

「くっ！またカウンター罠かよ！」

遊真はデッキからカードを引いた。

「よって《ギゴバイト》は戦闘破壊される！」

『あ~~~~~！！』

LP4000↓2750

「私は《黒魔導師クラン》を攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

《黒魔導師クラン》

攻1200守0

LP3000

手札1

《トイ・マジシャン》、《クラン》

伏せ1

《魔法族の里》

「これが、面白いこと…」

寮の階段で観戦している海里が呟く。

「《融合》を封じ、畏に対してカウンター…これじゃ遊真はどうしようも無い!」

「オレのターン!ドロー!」

引いたカードを願うように見る。

「よし!《マッドロブスター》を攻撃表示で召喚!」《マッドロブスター》

攻1700守1000

「これなら倒せる!《マッドロブスター》で《クラン》を攻撃!」

遊真は拳を握りしめる。

「それもさせない!トラップ発動《くず鉄のかかし》!モンスター1体の攻撃を無効にして、このカードをセットし直す!」

マッドロブスターは金属製のかかしにぶつかり、跳ね返された。

「…ターンエンドだ。」

遊真

LP 2750

手札 4

《マッドロブスター》

震えた遊真の声が終了を告げる。

（遊真…悔しいだろうなあ。ひなたさんに全て先手をとられて…）

「私のターン！」（まずは《マッドロブスター》を倒さないと。）

「ドロー！」

…スタンバイフェイズに《クラン》の効果発動！相手の場のモンスター1体につき、300ポイントLPを削る！」

《クラン》の飛ばした黒い衝撃波が遊真を襲った。

遊真

LP 2750 ↓ 2450

「…そして、チューナーモンスター《サニーピクシー》召喚！」
場に小さな妖精が現れる。

「チューナー？」

「今に分かるわ。」

レベル4《トイマジシャン》とレベル2《クラン》にレベル1《サニークシー》をチューニング!」

4 + 2 + 1 = 7

モンスターが星となり、1つになっていく。

「その姿、閃光のごとし!我を勝利へ導かん!

シンクロ召喚!希望の光、《アーカナイトマジシャン》!」

《アーカナイトマジシャン》(シンクロ)

攻4000守1800

攻撃表示

チューナー+チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上

「シンクロ召喚に成功したことにより《アーカナイトマジシャン》の効果発動!自身に魔力カウンターを2つ乗せ、1つにつき、攻撃力10000アップ!」

《アーカナイトマジシャン》

攻4000↓2400

「更に、《サニークシー》の効果!光属性のシンクロ召喚に成功したことにより、LPを1000回復!」LP3000↓4000

「シ、シンクロ召喚?」

遊真はひなたの場に現れた魔法使いを見て驚きの声をあげる。

「遊真、シンクロ召喚は2年前、インダストリアルイリュージョン

社のペガサス会長が作り上げた新しい召喚方法。

チューナーを使ってモンスターを同調させ、新たなモンスターを導く。…それがシンクロ召喚。でも、すぐに生産中止になったから、今でも珍しいカードなんだ。」

「新しい召喚方法か、おもしれー！燃えてきたぜ！」

未知のモンスターの召喚に遊真の眼に火が点いた。先ほどの悔しさに満ちた表情ではない。

「その威勢の良さもここまでだよ、《アーカナイトマジシャン》の効果！」

魔力カウンター1つを取り除く事で、場のカードを1枚破壊！

破壊するのはもちろん、《マッドロブスター》！」

魔力カウンター2↓1

攻2400↓1400

《アーカナイトマジシャン》の放った光の球が《マッドロブスター》を襲った。

「これでモンスターは居ない！《アーカナイトマジシャン》！ダイレクトアタック！」

《アーカナイトマジシャン》が呪文を唱えると、凄まじい音と共に稲妻が遊真に直撃した。

遊真

LP2450↓1050

「ターンエンド。」ひなた

LP4000

手札2

《アーカナイトマジシャン》

伏せ1

《魔法族の里》

（状況は私が明らかに有利…でも、遊真なら…）

「オレのターン！ドロー！」

「！！！」

遊真はドローしたカードを確認すると、少し笑ったように見えた。

（ひなた、オレはお前を信じて賭ける！）

「リバーズカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

遊真

LP1050

手札3

伏せ2

「私のターン！」

（リバーズカードが2枚…遊真のあの自信満々の顔、きっとあれは逆転のトラップ。）

「《アーカナイトマジシャン》の効果！魔力カウンターを1つ取り除き、右側のリバーズカードを破壊！」

魔力カウンター1↓0

攻撃力1400↓400

リバーズカード《エレメンタルバースト》が光の球に破壊された。

「よし！」

遊真は小さくガッツポーズをする。

（外した……今、発動できないトラップだった！）

そして遊真は衝撃の一言を発する。

「…残念だったな。」

ひなた、普通に攻撃されてれば、オレの負けだった」

「え!?!」

ひなたは焦って場を確認する。

（遊真のLPは1050…効果を使わなければ、攻撃力1400の《アーカナイト》の直接攻撃…）

「まさか！リバーズカードは《アーカナイト》の攻撃力を下げための…」

「そう！ブラフだったのさ！」

「くっ！」

ひなたは顔をしかめる。

（なんてプレイング…）

流石だね遊真！

でも残念。

…今の遊真の一言で私の勝ちだから。」

「手札から《魔導師の力》を《アーカナイト》に装備！自分フィールド上の魔法・罠1枚につき、攻撃力を500ポイントアップする！場の魔法・罠は3枚！

攻撃力1500ポイントアップ！」

《アーカナイトマジシャン》

攻400 ↓ 1900

「遊真のリバースカードはブラフ！ひなたさんの攻撃で終わりだ！」

海里は声を荒げて言う。

「その通りだよ！《アーカナイト》で遊真にダイレクトアタック！」

《アーカナイト》は呪文を唱え始める。

「…言っただろ、ひなた。ブラフ”だった”のさってな

リバースカード発動！」

遊真の場に残った1枚の伏せカードが開く。

「《闇よりの罠》！

LP3000以下の時にLP1000を払い発動！墓地の通常罠を除外して、その罠の効果を発動する！オレが除外するのは……」

LP1050↓50

遊真は墓地から1枚のカードを取り出す。

「さっき私が破壊した

《エレメンタルバースト》……」

「そうさ！ひなた！お前が《エレメンタルバースト》を破壊した事で、

1枚の罠がブラフから逆転のカードへと変わったんだ！

《エレメンタルバースト》の効果！

相手フィールド上のカード全てを破壊する……！！」

「きゃあ……」

カードから四色の光線が飛び出し、ひなたのフィールドの全てを洗い流した。残ったのは手札のみ。

「くっ、ターンエンド。」

ひなたLP4000

手札1

「オレのターン！反撃開始だ！！！」

ひなたの場合はガラ空き、モンスターどころか伏せカードも無い。

「魔法発動！《融合》！《E・HEROスパークマン》と《E・HEROクレイマン》を融合！
来い！《E・HEROサンダー・ジャイアント》！」

《E・HEROサンダー・ジャイアント》
攻2400守1500

遊真の場に雷をまとった巨人が現れた。

「更に、装備魔法、《フュージョン・ウェポン》！レベル6以下の融合モンスターに装備し、攻撃力を1500ポイントアップ！」

《E・HEROサンダー・ジャイアント》

攻2400↓3900

「バトル！《サンダー・ジャイアント》でダイレクトアタックだ！」

ひなた

LP4000↓1000

「ターンエンド！どーだ！ひなた！」

遊真

LP50

手札0

《サンダー・ジャイアント》

《フュージョン・ウエポン》

「私のターン！」

（手札は《魔法族の里》、ドローカードに懸けるしかない！）

「ドロー……！」

ひなたはゆっくりとカードを見て、言った。

「遊真！さっきの賭けはあなたの勝ち。でも、今度は……！」

ひなたは1枚のカードを出した。

「《時の魔術師》を攻撃表示で召喚！」

フィールドに時計の形のモンスターが現れた。

「《時の魔術師》の効果は表裏を宣言して、コイントスをする、当たったら、遊真の場のモンスターを全て破壊！

ハズレたら、私の場のモンスターを破壊し、その攻撃力の合計の半分のダメージを受ける！」

《時の魔術師》はおどけた顔に似合わず、どちらかの場を全滅させる強力なモンスター効果を持っていた。

「私は表を選択！」

…私のLPは100。遊真のLPは50。

表ならダイレクトアタックで私の勝ち、裏なら効果ダメージで私の負け！」

「決着か、燃えてきたぜ！来い！ひなた！」「《時の魔術師》の効果発動！」

宣言と共に、フィールドにコインが現れ、宙を舞った。

コインは高々と上がり、落ちてくる。

一回転、二回転、着地してからも回るコイン。
場の空気が張りつめる…

やがてコインは止まった。

向いた面は……”裏”

時の魔術師は時空の狭間へと消えていった…

「……………」。

ひなた

LP100↓0

「…いやあ、負けちゃったよ。やっぱり強いね、遊真は！」

眩しい位の笑顔でひなたは言った。

「…いや、今日はオレの運が良かっただけさ。」『その通りだよ。オイラを見殺しにするし。』

ギゴバイトは不満顔で言うが遊真は続ける。

「またやろうぜ！ひなた！」

そう言つて、遊真は手を差し伸べる。

「うん！次は私が勝つからね！」

ひなたもそれに応え、2人はガツチリと握手をした。それは、夕焼け空に輝いて見えた。

「わあ！早く帰らないと夕御飯に間に合わない！じゃあね！遊真、海里くん。」

「ああ、じゃあね！ひなた！」

落ちていく夕陽と共に、ひなたは走って帰って行った。

「…遊真、勉強は？」

「え！？」

次の日のテストで補習が2ヶ月に延びたのは、言うまでもない…

第3話 補習? (後書き)

《魔法族の里》なんて強いんでしょう。正直サイドチェンジ無しだとヤバい強さです。

感想、誤字脱字、要望、など、気軽に書いてください。

次回もー真紅の魂ーをよろしくお願いします。

第4話 衝突（前書き）

どーもエビフライです。

更新がなかなか出来ません。

自分の計画性の無さにびっくりです。

とりあえず、こゆっくりご覧下さい。

第4話 衝突

遊真たちが入学してから1ヶ月が経とうとしていた。

INデュエル場

「今日は一年生3寮合同の実技授業だ！」

デュエルリングの上に立っている堂林が、並んでいる生徒たちに向かって言った。

遊真たちにとって初めての实技授業だ。

「それにしても、堂林先生って凄いよね。」

遊真の後ろに並んで座っている海里が話しかける。

「ワカメが？」

まるで、どこが凄いんだ？と聞くように遊真は振り向いて返事をする。

「クロノス先生が校長になって、実技最高責任者を変えなくちゃいけないかったんだ。それで二年目の堂林先生が代わりに推薦。その上、寮長だよ。」

「へえ、ワカメのくせに、きつとまぐれ…え!？」

遊真の後頭部に、前方から弧を描いて飛んできたマイクが衝突した。

「おい！聞いてるか、チビ！補習3ヶ月にするぞー。」

「補習!?!」

補習という言葉が出ると、遊真は急に大人しく前を向いた。

（チクショー！人の弱みを盾にしゃがって〜！）

遊真は普通の授業に加え、毎日三時間の追加授業を1人で受けている…

「よし、班分けだ！渡したプリントどつりに班を作つて始める！」

この、3寮合同実技授業は、10人ほどの班を作り、その内2人がデュエルして、残りがそのデュエルの批評をするというものだ。

「今日は…遊真は僕と一緒にだね。」

海里がプリントを見て言う。

「ああ、…ひなたも一緒にだね。」

「そのとーーり！！」

ああ、いつも変わらず、可愛い可愛い。」

ひなたは遊真の背後から現れ、頭を撫で回した。

「むきやー！それやめろー！！」

…そうしている内にメンバーが集まった。

「さあ、準備ができたらデュエルを始めろ！」

リング中央の堂林が叫ぶ。

「さて、オレたちの組み合わせは…」

遊真はプリントを見る。

桜井ひなた対五十嵐一希

「なんだ、オレじゃ無いのか…」

組み合わせを見て遊真はがつくりと肩を落とす。

「落ち込んでる場合じゃないよ！遊真！！」

遊真の両肩を揺さぶり、海里が言う。

「え…デュエル出来ないのに…？」

元気の無い遊真をよそに、興奮して海里が言う。

「ひなたさんと五十嵐くんだよ！実質、アカデミア1年トップ決定戦だよ！」

「…五十嵐って、誰？」

遊真の一言で数秒間の沈黙が流れ、ため息をつきながら海里が言った。

「…全日本ジュニアのチャンピオンだよ…」

「ジュニアのチャンピオン……ああ、入試の時のあのロン毛！」

遊真の記憶が鮮明になる。ぶつかった事、ワインターンキルを決めたこと、…チビと言われたこと。

思い出して、イライラがこみ上げてきた遊真は叫んだ。

「…ウガー！！あのロン毛野郎！ひなたにやられちまえー！」

「それは難しいかもねー。」

またもや遊真の背後からひなたが現れた。

「うわ！？またかよ！」

「まだデッキが完成してなくてね。いわゆる調整中ってところかな。」

ひなたは笑いながら言った。

「調整中って……そんなデッキで戦えるのかよ、ひなた！」

ひなたの言葉を聞き、遊真は尋ねる。

「ん、…まあ、遊真と五分五分だったから大丈夫だよ！多分！」

そう言って、ひなたはデュエルリングに走っていった。

「…え！？てことは…」

『ゆうまが運良くギリギリで勝ったのは未完成のデッキだったってことだな！』

右肩に現れたギゴバイトが言った。

「…マジかよ…！？」

遊真とひなたのデュエルのLP差は50、しかも最後はコイントスによる決着…

「…じゃあ、本当のひなたはもっと強いのか…
くうく、燃えてきたぜ！」

「遊真ー！こっちだよ！早くこないと始まっちゃうよー！」

デュエルリングのそばで海里が叫んだ。

「ああ、今行く！」

遊真は海里の所へ走り出した。

――――

リング上には、太陽のような笑顔の少女、桜井ひなたと、重苦しい雰囲気を身に纏った少年、五十嵐一希が対峙していた…

「よろしくね！五十嵐くん。いやゝ、ジュニアチャンプと勝負出来るなんて光栄だよ。」

微笑みながらひなたは言う。相変わらずの笑顔だ。

「……入試1番…、暇つぶしにはなるか…。」

五十嵐は重々しく口を開くとそう言った。

「じゃ、始めよっか！」

「……………」。

「デュエル!!」

ひなたLP4000
五十嵐LP4000

「私の先攻、ドロー」

ひなたの先攻でデュエルは始まった。

「私は《召喚僧サモンプリースト》を召喚!」

《召喚僧サモンプリースト》
攻800守1600

ひなたの場に年老いたモンスターが現れた。

「《サモンプリースト》の効果で召喚、反転召喚した時、守備表示になる。」

…更にもう一つの効果発動!手札の魔法カードを捨てる事で、デッ

キからレベル4モンスターを特殊召喚！来て！《マジシャンズ・ヴァルキリア》！」

《マジシャンズ・ヴァルキリア》

攻1600守1800

守備表示

「手札から魔法カード《二重召喚》発動！この効果で、私はこのターン2度通常召喚が出来る！《マジシャンズ・ヴァルキリア》を召喚！守備表示！ターンエンド！」

ひなたLP4000

手札2

《サモンプリースト》、《ヴァルキリア》×2

「おお！一気に3体のモンスターを出したぞ！やっぱりスゲーぜ、ひなた！」

リングサイドで興奮気味に遊真が言う。

「それだけじゃないよ。《ヴァルキリア》は他の魔法使い族への攻撃をさせない効果を持ってるんだ！今、《ヴァルキリア》は2体！つまり……」

(…そう、海里くんの言う通り、《ヴァルキリア》の効果でロックが完成した。まずは様子見。

…遊真、さっき勝つのは難しいって言ったけど、負けるつもりは全然無いよ!!)

「俺のターン…。《手札抹殺》を発動！お互いに手札を全て捨て、捨てた枚数分ドローする。」

《手札抹殺》を見て遊真は言う。

「あれ、ロン毛の奴、手札事故か？」

(…違う！五十嵐くんの目的は…!!)

デュエルリングの上で対峙しているひなたは既に五十嵐の考えを感じ取っていた。

「《手札抹殺》で手札から捨てられた《暗黒界の軍神シルバ》、《

暗黒界の武神《ゴールド》を攻撃表示で特殊召喚！」

《暗黒界の武神《ゴールド》》 攻2300 守1400

《暗黒界の軍神《シルバ》》 攻2300 守1400

「《ゴールド》、《シルバ》は効果で手札から墓地に捨てられた時、特殊召喚できる…。」

金と銀に輝く巨大なモンスターが現れた。お互いが対になっているようだ。

「《ゴールド》と《シルバ》……でも、たとえ上級モンスターでも口ツクは破れないよ！」

巨大なモンスターを目の前にしても、ひなたは堂々と言う。

「…まさか、これで終わりだと思っているんじゃないだろうな。《手札抹殺》で捨てられた《暗黒界の刺客カーキ》の効果発動！手札から効果で捨てられた時、
…相手モンスターを1体破壊する。」

《暗黒界の刺客カーキ》 攻300 守500

「破壊するのは、当然！《マジシャンズ・ヴァルキリア》！！」

《カーキ》が《ヴァルキリア》の背後に現れ、短剣を突き刺す。《ヴァルキリア》は《カーキ》と共に消えていった。

「これでロックは解除された…。更に通常召喚！《暗黒界の狂王ブロン》、攻撃表示！」

《暗黒界の狂王ブロン》

攻1800 守400

「バトルフェイズ！《ゴールド》、《シルバ》で守備モンスターを攻撃！」

攻撃を受け、《サモンプリースト》、《ヴァルキリア》が消えていく。

「《ブロン》でダイレクトアタック！」

ひなた

LP4000 ↓ 2200

「ああ、ひなたさんのLPが…、場にもモンスターはいないし…。」
リングサイドで海里が嘆く。

「大丈夫だ、海里！ひなたなら…きっと逆転の一手を持つてるさ。」
海里の肩を叩きながら遊真は言う。

（…私の手札には相手モンスターを破壊する《ライトニング・ボール
テクス》がある。絶対に次のターンで巻き返す！）

ひなたはカードに決意を込めた。その顔に、まだあきらめの色は無い。
い。

「いい顔だな…」
…だが、お前に次のターンは無い。」

「！？」

「《暗黒界の狂王ブロン》の効果発動！相手に戦闘ダメージを与えた時、俺は手札を一枚捨てる事が出来る。手札から捨てるのは、
…《暗黒界の武神ゴールド》！！」

黄金の鎧を身に着けた、2体目の《ゴールド》が現れる。

「…まだバトルフェイズ中。
…これで終わりだ《ゴールド》でダイレクトアタック！」

《ゴールド》は巨大な斧を振り上げる。

「そんな！？わ
ひなた
LP 2200 ↓ 0

《ゴールド》の攻撃でひなたのLPは尽きた…

（ワ、ワンターンキル……。）

ひなたはその場に崩れ落ちる。既に笑顔は消えていた。

デュエルディスクを外し、五十嵐が言う。

「所詮、この程度のヤツか…、暇つぶしにもならん雑魚だったな。」

ひなたはうつむき、悔しさで拳を握りしめる。

（ワンターンキル…。全く歯が立たなかった…。）

「ひなたさん……。」

遊真！ひなたさんを励ましに……。あれ？」

海里が横を向いた時、数秒前まで隣にいた遊真の姿はなかった。

ガシッ

海里がリングに目を戻すと、遊真はいた。
…五十嵐の胸元をつかみあげた状態で。

「デメエ！雑魚ってどうゆう事だ！！」

物凄い剣幕で遊真が迫る。
遊真の手を振り払い、五十嵐が答えた。

「オシリスレッドは言葉も分からないのか？この程度で1番？笑わせるな！」

五十嵐の冷たい視線が遊真を捉える。

「ひなたはなあ、デッキがまだ……。」

「遊真！いいんだ…。完全に私の実力負け。
…だから、いいんだ……。」

ひなたの言葉が遊真を遮る。

「…よくねえ！！！」

「！？」

遊真は拳を握りしめて言う。

「オレは仲間を馬鹿にされて、黙っていらねえ！！！」

「駄目だよ！遊真！」

ひなたの言葉も遊真の耳には入らず、その拳は、五十嵐めがけて放

たれた。

パーン

高々と鳴り響く音…

握られた遊真の拳は…

堂林の掌に受け止められていた。

「…なにしてんだ、チビ。」

堂林はそう言うと、生徒に授業終了を告げ、遊真を連れて戻っていた。

――
IN教室

広い教室には遊真と堂林のみ、2人の影が寂しく映る。

「で、バカにされて頭にきた、と。」

遊真と堂林が向かい合って座っている。

「そつだよ、でも…！」

「でも…？何を言ってる、俺様が止めなきゃ、お前は停学、下手すりゃ退学だったんだぞ。」

いつもとは違う厳しい目で遊真を見つめる。

「……………」

喉に言葉がつまり、遊真は何も言えなかった。

「まったく、これだから頭を使わん奴は…」

堂林はそう言つて、1枚のプリントを差し出した。

「なんだよ、これ……………行事予定表？」

遊真は上から下へプリントを眺める…
途中には赤い丸印が付けてあった。

「ワカメ、これって…」

「一週間後だ…」

デュエリストだったら、カードで語れ。お前の手は殴る為にあるんじゃないねえ。

…俺様の顔に泥を塗るなよ。」

堂林は遊真の顔に指を突きつけそう言った。

「返事!!」

堂林はなかなか答えない遊真に催促した。

「…はい！サンキュー！先生！」

遊真は走って教室を出て行った。

窓から景色を見る堂林、外は今にも雨が降りそうだ。

「…カードで語れ」…か
語るカードを失った俺の言う事じゃねえな…」

残された紙の赤い丸は…

一年代表エキジビジョン

レッド ブルー
伴遊真対五十嵐一希

を示していた…。

第4話 衝突（後書き）

暗黒界系は、名前がユニークでいいですよねー（あれ、自分だけか？）

次回の更新は頑張りたいと思います。

感想、要望、誤字などありましたら気軽に書いて下さい。
これからもー真紅の魂ーをよろしく願います。

第5話 エリートVS落ちこぼれ（前書き）

前回更新を頑張ると言ったばかりなのに、なかなか更新出来ませんでした。

読んで下さっている方々、本当に申し訳ありませんでした。

第5話 エリートVS落ちこぼれ

INレッド寮

「えー！遊真、一年生エキジビジョンの代表に選ばれたの！？」

海里は眼鏡を飛ばす程驚いた。

「ああ、これであのロン毛を倒せるぜ！」

遊真は笑いながらガッツポーズをする。

「凄いよ！遊真！エキジビジョンの代表は、その学年の実技担当の先生とクロノス校長が選んだ、たった2人だけだよ！」

「…オレはワカメに言われたぞ。」

3 寮合同実技授業の日、遊真は教室で堂林に代表の話を伝えられた。

「…ということは、五十嵐くんはクロノス校長先生の推薦だね。」

遊真の脳裏にひなたと五十嵐のデュエルが蘇る。巨大なモンスター、隙の無い攻撃、そして…ワンターンキル。

「よし！海里、外いくぞ、特訓だ！あのロン毛をぶっ倒す！」

突然、海里の手をつかむと、遊真はそのまま引っ張っていった。

「ええ！？僕も！？」

ガチャ！！

戸が勢いよく開いた。

…しかし、開けたのは遊真ではなかった。

「…えっと、盗み聞きするつもりは無かったんだけど……、とりあえず、代表おめでとう！遊真！」

開いた戸の先に立っていたのは…ひなただった。

「あ…、えっと。」

遊真は少しうつむく、返す言葉が見つからない。圧倒的に負けたひなたを目の前にして、なんとさえいいのか、遊真は分からなかった。

「なんで遊真が暗くなってんのさ！バシッといこうよ、バシッと！」

遊真の肩を叩いてひなたは言う。

「…遊真は、負けた私をかばってくれた。それで気遣いは十分だよ。」

「ひなた…。」

「さあ、顔上げて！勝つために特訓するんでしょ！私が稽古つけてあげる！ビシバシいくから覚悟してね！」

ひなたは笑って言った。

…負けた悔しさを隠している

いつもと違う造られた笑顔…

それが手にとるように分かる…。

「…そうだな…そうだな、勝つ為に…、
よーし！特訓だ！

…お前の代わりに五十嵐に絶対勝つ…！！」

遊真はうつむいていた顔を上げ、はっきりと言った。

（…ひなたは無理して来てくれた、だったら…

…オレは絶対それに応える！！）

遊真とひなた（+海里）の特訓が始まった。

その頃…

INブルー寮

「シニョール五十嵐！
ちよっと待つノーネ！」

荘厳な設計、美しい装飾、豪華に造られたブルー寮の渡り廊下。

五十嵐はそこでクロノスに呼び止められた。

五十嵐は歩みを止め、振り返る。

「…何でしょうか、校長」

五十嵐は落ち着いた物腰で答える。

「アナタを、エキジビジョンの代表に、私が推薦するノーネ。出
てくれるノーネ？」

クロノスは手を組んで尋ねる。

「…光栄です。もちろん出場させて頂きます。」

「…ところで、相手は誰ですか？また、桜井ひなたですか？」

「ノン、ノン、ノン！オシリスレッドの伴遊真なノーネ！」

クロノスは人差し指を振って言う。

（あのチビか…）

「オシリスレッドなど俺の敵ではありません。必ず勝利します…必ず。」

五十嵐はキツパリと答えた。言葉には力がこもっていた。

「いい返事なノーネ。」

…しかし、相手を甘く見ていると、足元を掬われるかもしれないノーネ。

どんなデュエルにも全力を尽くすノーネ！」

そう言うと、クロノスは回れ右をして、元来た廊下を戻っていった。

（シニョール五十嵐…）

”彼”が残した言葉が事実なら、今のアナタはこれから本当に苦しむ事になるノーネ。）

――――

それぞれの思いを持って一週間が過ぎた。

INデュエル場

エキジビジョンにも関わらず、すでにデュエル場には沢山の二年生、三年生が集まっていた。

エキジビジョンの主役の1人である伴遊真とそのルームメイト如月海里はデュエル場への廊下を歩いていた。

「いよいよだね、遊真。」

遊真の隣を歩く海里が話しかけた。

「ああ、特訓の成果をバツチリ見せてやるぜ！」

自信満々な顔で遊真は答える。

ガラッ

「うんうん、気負ってなくていい感じだね！遊真！」

「…ひなた？」

太陽のような笑顔をふりまく、誰もが認めるアカデミアの美少女、桜井ひなた…

その美少女は、蜘蛛の巣と葉っぱを体中につけて突然、窓から登場

した。

「いやー遅刻して、森の中を近道して来たら、こんな事に…」

体についた葉っぱを払いながら言う。

「でも、ちゃんとカードは持ってきたよ！はい！」ひなたはカードケースから1枚のカードを取り出し、遊真に手渡す。

「おお、サンキュー！」

遊真は受け取ったカードをデッキに加えた。

「…でも、いいの？そのカード、扱いが難しいよ。」

ためらいもなくデッキにカードを入れ、シャッフルしている遊真を見て、ひなたは言う。

「大丈夫！何とかなるさ。」

遊真がそう言い終わると同時に、校内放送が流れた。

「オシリスレッド伴遊真、オベリスクブルー五十嵐一希、デュエル場に入場するノーネ。」

「よし！じゃあ行ってくる。」

遊真は手を振って走っていった。廊下を曲がり、遊真の姿が見えなくなった。

「ひなたさん、遊真の勝率って…」
海里が不安げに尋ねる。

「遊真はこの1週間だけで十分な力をつけた。
……それでも、勝率は10パーセントあるか、ないかのラインかな。」

「10パーセント…」

「確かに手札事故やドロの運も勝負の決め手になる。でもね…
五十嵐くんはそれらを全て乗り越え、ジュニアチャンプになった。」

少し位のアクシデントでは揺らがないと思う。」

「そっか…」

海里はため息をつきながら言う。

「…でもね、海里くん。私、”遊真なら勝てる”って思うの。勝率なんか度外視して、ね。」

「そうだね、遊真ならきつと…。
ひなたさん！早く応援しに行こう！」

「ああ、待つて！海里くん！」

海里とひなたは廊下を走ってデュエル場に向かった…。

ざわついているデュエル場。かなりの生徒が観に来ている。ほぼ満席だ。

「えー、これから1年生代表エキジビジョンを開始する。代表者はリングに上かれ！」

堂林がマイクを通して話す。マイクの雑音がデュエル場に響く。

「オベリスクブルー代表五十嵐一希！対オシリスレッド代表チビ…じゃなかった、伴遊真！」

遊真と五十嵐、2人がリングに上がってくる。五十嵐は目をつむりながら、遊真はその五十嵐をにらめつけながら…。

（集中しているな…。”チビ”って言っても反応しねえ。）

遊真は一心に五十嵐を見つめていた。

（まあ、1週間前の事を思い出して頭にきてなきゃいいがな…。
……時間だ。）

「これからエキジビジョンを開始する！先攻、後攻は…」

堂林の声を遮って、五十嵐が言った。

「…伴遊真、さぞかし桜井ひなたの敵を取りたいだろう。あの時と同じ、先攻をくれてやる。」

…結果は同じだろうがな。」

皮肉たっぷりの言葉と共に、五十嵐はたやすく先攻を譲り渡した。

（…チビ、挑発に乗るな、コイツは後攻ワンキルを狙ってるぞ…！
！）

…しかし、堂林の心の声は届かなかった。

「当然だ！今度はオレが勝つ！！！」

遊真は拳を突き出し、叫んだ。

「それじゃあ、俺が後攻だ、威勢だけのオシリスレッド。」

「デュエル！！！」

遊真LP4000

五十嵐LP4000

（クソチビい！あっさり挑発に乗りやがって、テメーの頭なら策なんか考えてねえだろうが！）

堂林がリングサイドで歯ぎしりをさせながら観戦している。

「いくぜ！オレのターン！ドロー！」

勢いよくデッキからカードを引く。

「オレは《フアランクス》を守備表示で召喚！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

《フアランクス》レベル3、地属性、獣族
攻800守900

遊真LP4000

手札4

《フアランクス》

伏せ1

「俺のターン、ドロー！」

五十嵐がほくそ笑む。

（《手札抹殺》…このターンで終わりだ…！！）

「手札から《サイクロン》発動！場の魔法、罫を1枚破壊する！」

場に強風が吹き荒れる。遊真のリバースカードがぐらつく。

「させないぜ！リバースカード発動！《和睦の使者》！」

風に飛ばされるより一瞬早く伏せカードが開いた。

「《和睦の使者》の効果は……分かってるよな、五十嵐！」

「…このターン、貴様のモンスターは戦闘破壊されず、戦闘ダメージも受けない…」（くそ！このターン、奴を倒す事は出来ない…！）

五十嵐は舌打ちをして、手札からカードを選ぶ。

「《デーモンソルジャー》を攻撃表示で召喚！ターンエンド！」

《デーモンソルジャー》

レベル4 闇属性悪魔族

攻1900 守1500

五十嵐LP4000

手札4

《デーモンソルジャー》

リングサイドの堂林は驚きを隠せずにいる。

（ワンターンキル対策のフリーチェーンの罠！？

…あの攻撃重視の赤点バカチビはそんなの思いつかねえだろ！誰か
入れ知恵した奴が…）

デュエル場2階席

「いいぞー、遊真ー！やったね！ひなたさん！ワンターンキルを防
いだよ！」

「うん、でもまだ1ターンだけ…。それに、守るだけじゃ勝てない
…。」

リングに立っている遊真を見つめる。

「…遊真、油断禁物だよ…。」

「オレのターン！ドロー！」

（よし！いける！）

「オレは手札からフィールド魔法、《フュージョンゲート》を発動！その効果により、融合素材をゲームから除外する事で、《融合》無しで融合召喚を行える！」

デュエルリングが歪んだ空間へと姿を変える。

「手札から、《E・HEROバーストレディ》と《E・HEROフエザーマン》を除外し、《E・HEROフェニックスガイ》を融合召喚！」

《E・HEROフェニックスガイ》
レベル6炎属性戦士族

攻2100 守1200

「バトルフェイズ！《フェニックスガイ》で《デーモンソルジャー》を攻撃！フェニックスシュート！」

五十嵐LP4000↓3800

「よし！ターンエンド！」

遊真LP4000

手札2

《フェニックスガイ》、《フアランクス》

《フュージョンゲート》

「俺に傷を負わせるとはな…。」

…覚悟しろ、伴遊真。俺のターンだ！」

（…チビ、注意しろよ。エリートが本気になってきたぜ…。）

「《手札抹殺》発動！手札を全て捨て、その枚数ドロ！」

遊真は2枚、五十嵐は4枚のカードを捨て、新たにカードを引く。

「《暗黒界の武神ゴールド》、《暗黒界の軍神シルバ》の効果発動！効果で手札から墓地に送られた時、特殊召喚出来る！行け！《ゴールド》、《シルバ》攻撃表示！」

《暗黒界の武神ゴールド》レベル5闇属性悪魔族
攻2300守1400

《暗黒界の軍神シルバ》レベル5闇属性悪魔族
攻2300守1400

「更に、《暗黒界の策士グリーン》の効果！手札から墓地に捨てられた時、場の魔法、罫を1枚破壊出来る！《フュージョングート》を破壊！」

《フュージョングート》が破壊された事で、歪んだ空間が消え去り、元のデュエリングに戻った。

「バトルフェイズ！《ゴールド》で《フェニックスガイ》を攻撃！」

遊真LP4000↓3800

《ゴールド》の斧が《フェニックスガイ》の腕に食い込む。

「《フェニックスガイ》は戦闘では、破壊されないぜ！」

「そんな事は知っている！《シルバ》で《フェニックスガイ》を攻撃！」

遊真LP3800↓3600

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

五十嵐LP3800

手札2

《ゴールド》、《シルバ》

伏せ2

「オレのターン！ドロー！」遊真はドローカードをそのまま発動した。

「《ミラクル・フュージョン》を発動！このカードは、墓地の融合素材を除外する事で融合召喚が出来る！」

(…《手札抹殺》で墓地に捨てた《スパークマン》と《クレイマン》を融合して、攻撃力2400の《サンダージャイアント》を召喚すれば…。)

遊真の考えついた逆転の策。

…しかし、五十嵐が1枚上手だった。

「トラップ発動！《闇の取引》！」

「《闇の取引》！？」

「《闇の取引》は1000ポイントのLPを払う事で相手の発動した通常魔法の効果を”相手の手札をランダムに1枚捨てる”に変更する！」

五十嵐LP3800↓2800

「さあ、選べ！伴遊真！」

五十嵐は手札を突き出す。

「…1番左のカードだ。」

「貴様が選んだのは《暗黒界の刺客カーキ》その効果で相手の場のモンスターを1体破壊する。

…破壊するのは、《フェニックスガイ》！」

《カーキ》の短剣が深々と突き刺さる。《フェニックスガイ》はうめきをあげて消えていった…。

「く…！」

《フェニックスガイ》が…！」

遊真は防御の要、戦闘破壊されない《フェニックスガイ》を失った。

（このままじゃ…。何か手を打たないと…！）

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

遊真LP3600

手札0

《ファランクス》

伏せ1

「俺のターン！ドロー！手札から《暗黒界の取引》を発動！デッキからカードを1枚ドローし、その後、手札から1枚捨てる。」

遊真と五十嵐、互いにデッキからドローし、選択して捨てる。しかし、遊真の手札は0。引いたカードを捨てる以外に選択の余地はない。

（装備魔法…今は必要無いか…。）

遊真はそのままドローカードを墓地に捨てる。

…そして、即座に五十嵐が畳み掛けてくる。

「俺は手札から捨てた《暗黒界の武神ゴルド》の効果を発動し、攻撃表示で特殊召喚！」

巨大なモンスター3体が遊真の前に立ち上がる。

… 対する遊真のモンスターは1体のみ。

「バトルフェイズ！《シルバ》で《ファランクス》を攻撃！」

《シルバ》が足を振り下ろすと、《ファランクス》はいとも簡単に踏み潰された。

「…これで終わりだ！2体の《ゴールド》で直接攻撃！」

《ゴールド》が大斧を振りかぶる…。

「リバーズカード《スケープ・ゴート》を発動！攻守0の羊トークン4体を守備表示で特殊召喚する！！」

遊真の場に可愛い羊が現れる。

「攻撃続行だ！叩き潰せ！《ゴールド》！」

《ゴールド》の攻撃でトークンは真つ二つとなり、残り2体となった。

「ターンエンド！」

五十嵐LP2800

手札1

《ゴールド》×2《シルバ》

伏せ1

「…どうした？羊トークンで時間稼ぎか？見苦しいぞ、伴遊真！」

「うるせー！！オレは信じるデッキとカードがある限り、絶対にあきらめねえ！」

オレのターン！ドロー！」

遊真は静かにドローカードを確認する。

「これは…！？」

…次話へつづく。
…。

第5話 エリートVS落ちこぼれ（後書き）

今回登場した通常モンスターについて…

《ファランクス》

てきすと

上にも下にも顔がある、気持ち悪いヤツ。口からレーザーを吐く。

ええー！？気持ち悪いヤツって、コナミさん、《ファランクス》が
かわいそうすぎます。

誤字脱字、感想、要望などありましたら、気軽に書いてください。

次回もー真紅の魂ーをよろしく願います。

第6話 イレギュラーボーイ（前書き）

前回までのあらすじ

By 海里

遊真と五十嵐くんのエキジビジョンが始まった。

遊真はひなたさん（+僕）との特訓の成果で何とかワンターニキルを防いで反撃に出る。

…でも、五十嵐くん得意の暗黒界モンスター高速展開に大ピンチ！

《スケープ・ゴート》でなんとかしのいだけど…、

一体どうなっちゃうんだろう…。

注！（第5話の後半から読んだ方が良いかも…。）

第6話 イレギュラーボーイ

「これは…!?!」

遊真はドローカードを見て笑って言った。

「…五十嵐、見せてやるぜ!

…墓地に捨てる事で力を得るのはお前だけじゃないって事をな!」

遊真LP3600

手札1

羊トークン×2

五十嵐LP2800

手札1

《ゴールド》×2、《シルバ》

「何を戯れ言を…。」

五十嵐は遊真と目が合った。
遊真の眼が五十嵐を見つめる。その真っ直ぐな眼はとても嘘をついている様子には見えない。

「…ふん、面白い。やれるものならやってみろ！」

「よし、いくぜ！これがオレの答えだ！」

その言葉と同時に遊真は墓地から3枚のカードを取り出す。

「《暗黒界の取引》によつて墓地に送つた《神剣ーフェニックスブレード》の効果発動！
墓地の戦士族モンスターを2体除外して、このカードを手札に加えるぜ！」

遊真が《フェニックスブレード》を手札に加えると、五十嵐は鼻で笑った。

「“墓地に捨てる事で力を得るのはお前だけじゃない”…大口を叩いておいてそれを回収しただけか？」

…今更、攻撃力を僅かばかり上げた所でこの状況を逆転する事は出

来ないぞ！！」

五十嵐は遊真を指差して言った。

（確かに五十嵐の言う通りだ。チビのローレベル中心のデッキでは、300ポイント攻撃力をあげたところで、《ゴールド》、《シルバ》は倒せない……！！）

「オレの目的は攻撃力を上げる事じゃないのさ、五十嵐。

…モンスターを除外する事だ！
手札から魔法発動！《平行世界融合》（パラレルワールドフュージョン）！！」

「パ、平行世界融合だと！？」

遊真は2枚のカードを胸ポケットから取り出した。

「《平行世界融合》はゲームから除外された融合素材をデッキに戻すことでE・HEROと名の付く融合モンスターを融合召喚出来る！

オレはさっき除外した《E・HEROフェニックスガイ》と《E・HEROスパークマン》をデッキに戻し、《E・HEROシャイニ

ングフェニックスガイ》を融合召喚！」

《E・HEROシャイニングフェニックスガイ》レベル8 炎属性、戦士族

攻2500 守2100

「《シャイニングフェニックスガイ》の効果で墓地のE・HERO 1体につき攻撃力を300ポイントアップ！」

…墓地には1体！よって攻撃力2800！」

《シャイニングフェニックスガイ》

攻2500 ↓ 2800

「更に手札から《フェニックスブレード》を装備！」

攻2800 ↓ 3100

「…く、そんなバカな！」

「いくぜ！バトルフェイズ！《シャイニングフェニックスガイ》で《ゴールド》を攻撃！シャイニング・フィニッシュ！」

《シャイニングフェニックスガイ》が光り輝いたと思うと、《ゴールド》は次の瞬間フィールドから姿を消した…。

五十嵐LP2800↓2000

「ターンエンドだ!」

遊真LP3600

手札0

《シャイニングフェニックスガイ》、羊トークン×2
《フェニックスブレード》

「く…!俺のターン!ドロー!」

ドロー後も五十嵐の顔は晴れず、手札のカードに触れようとしないかった。

「《ゴールド》、《シルバ》を守備表示にして、ターンエンド!」

巨大なモンスター達は、身を縮めて守備の体勢をとる。

五十嵐

LP2000

手札2

《ゴールド》、《シルバ》

「よし！オレのターン！ドロー！」

遊真は引いたカードを確認すると、すかさずバトルフェイズに移行した。

「いけ！《シャイニングフェニックスガイ》で《ゴールド》を攻撃！」

《シャイニングフェニックスガイ》は再び輝き出す。そして、その光と共に《ゴールド》は姿を消した。

「カードを1枚伏せターンエンド！」

ワアアアアア！！！！

いいぞー、オシリスレッドー！！

勝てる、勝てるー！！

遊真の逆転はジュニアチャンプを追い詰め、番狂わせを起こしかけている。

当然、会場は既に興奮の坩堝だ。

…ただ1人を除いては

（くそ、くそ！くそ！俺が落ちこぼれのオシリスレッドに敗北だと！？

…いやだ、嫌だ！！

俺は、俺は…あの人のように…！！）

—————

…七年前

広いデュエル場に豪華な観客席、大きな照明…。

…その時の俺にはとてもまぶしかった…。

別段他人と変わりのない家庭に生まれ、平凡な日々を過ごした。

他人に誇れるような飛び抜けた才能も特技も持っていない…、それは子供心に分かっていたし、半ば諦めていたのかもしれない。

ある日、父親が俺をプロデュエルの観戦に連れて行った。

今や老若男女問わず人気のあるデュエルモンスターズ…。
当時の俺はやってはいなかったが、もちろん知っていた。
その上、プロの試合となると、テレビで放送されるほどの需要がある。

見た試合は負けの続いているデュエリストの再起戦。

それが”あの人”との最初の出会い…。

何故か”あの人”は俺の身近に感じられた。

…周りに負け続けで勝利が遠い。

そんな所を自分と重ね合わせていたのかも知れない。

デュエルの開始が宣言されたかと思うと、数十秒後、デュエル場に雷のような轟音が鳴り響き、一瞬でデュエルは終わった。

勝ったのは”あの人”。

風格のあるたたずまい。今まで連敗を重ねていたデュエリストとは思えなかった。

気付けば俺は父親の制止を振り払い、”あの人”の元に走り出していた。

”あの人”には控え室前の廊下で追いついた。そこで俺は質問した。

興奮していたからか、息を切らしたガキの頃の俺が何を聞いたか正確には覚えていない…。

しかし、すぐに返ってきた”あの人”の返事は7年たった今でも、一字一句覚えている…。

「戦う理由？…オレは勝利を追求しているだけだ…。

…勝利の代償の苦勞も！苦痛も！

…挙げ句に命を失う事になっても、オレは構わん。それで勝利が得られるなら…。」

それだけ言っと、”あの人”は行ってしまった。

「ヘルカイザー亮…。」

俺の口は”あの人”の名をつぶやいた。

歩いていくあの人の背中が俺にデュエリストの道を示してくれた…。

—————

（俺は負けない！このデュエルアカデミアで無敗を誇った”あの人のように…”。

俺の…、俺自身の”力”で勝利を手にしてみせる…！！）

「俺のターン！ドロー！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」五十嵐LP2000

手札2

《シルバ》

伏せ1

五十嵐は1枚のリバースカードを伏せただけでターンを終えた。

「オレのターンだ！ドロー！」

手札がドローカードしか無い遊真はそれを即座に発動する。

「魔法発動！《魔の試着部屋》！デッキの上を4枚めくり、その内レベル3以下の通常モンスターを特殊召喚！」

遊真はデッキの上から4枚を引き、確認する。

「1枚目、《炎を操る者》！」

2枚目、《団結するレジスタンス》！」

3枚目、《玉碎指令》！」

4枚目、《海皇の長槍兵》！」

遊真の引いた4枚中3枚が、レベル3以下の通常モンスター。

「あれ？ひなたさん、遊真のモンスターゾーンは2つしか空いてないよ。」

海里はひなたに尋ねる。

「この場合、遊真は召喚するモンスターを選択する事が出来るんだ。でも、この状況なら…」

遊真は3枚の内2枚を選び出す。

「オレは《団結するレジスタンス》と《海皇の長槍兵》を攻撃表示で特殊召喚！」

《団結するレジスタンス》レベル3、風属性、雷族

攻1000守400

《海皇の長槍兵》 レベル2、水属性、海竜族
攻1400守0

「ダイレクトアタックが通れば、オレの勝ちだ！バトルフェイズ！
行け！《シャイニングフェニックスガイ》！《シルバ》を攻撃！」

《シャイニングフェニックスガイ》の攻撃で《シルバ》が消え去った。

「やつ…た？」

遊真の言葉の語尾が疑問形になる。《シルバ》と共に《シャイニングフェニックスガイ》の姿も消えていた。

あつたのは、五十嵐の場の赤いカード。

「俺のトラップカード《道連れ》が発動している。
自分の場のモンスターカードが墓地に送られた場合、相手の場のモ

ンスター1体を破壊する。これで貴様の《シャイニングフェニックスガイ》を除去させてもらった…。」

五十嵐の説明と共に、役目を終えた《道連れ》が消滅していく。

「けど、残りのモンスターの直接攻撃で、オレの勝ちだ！《団結するレジスタンス》でダイレクトアタック！」

武器を持った群集が五十嵐に襲いかかる。

「ダメだ！遊真！それは罠…。」

五十嵐LP2000↓1000

「急にどうしたの？ひなたさん。攻撃は通ったよ？」

ひなたが言った突然の言葉に、海里が尋ねた。

「…違うよ、海里くん。五十嵐くんは《道連れ》の効果で好きなモンスターを破壊出来た…」。

残りのモンスターの攻撃でLPが0になるこの状況で、このターンもう攻撃出来ない《シャイニングフェニックスガイ》は破壊しない。破壊するのは、攻撃権利の残っている通常モンスターのどちらか…。

「

「え、じゃあ…。」五十嵐の作戦に気づいた海里の頬に冷や汗が流れる。

「…うん、五十嵐くんは攻撃をわざと”通した”。」

《レジスタンス》の攻撃を受けると、五十嵐は手札から1枚のカードを抜き出した。

「俺にこのカードを使わせるとはな…」。

来い！《冥府の使者ゴース》！《冥府の使者カイエン》！」

五十嵐の場に鎧を身にまとった2体のモンスターが現れた。《ゴーズ》は攻撃表示、《カイエン》は守備表示だ。

「ま、待てよ、五十嵐！まだ、オレのターンだぜ！？
なに勝手にモンスターを召喚してんだよ！」

遊真は五十嵐の《ゴーズ》、《カイエン》に驚きをみせる。

「オレはこんな奴に苦戦中なのか…。今日のデュエルは人生最大の汚点だな。」

ため息をつきながら五十嵐が言った。

「なんだとー！！！」

遊真は腕を振り回し始めた。それを無視して五十嵐は話し始める。

「《ゴーズ》は自分の場にカードが存在しない時に相手からダメージを受けた時に、特殊召喚出来る。今回は戦闘ダメージ、よって受けたダメージ分の攻守を持つ、《カイエントークン》を特殊召喚する。」

《冥府の使者ゴーズ》レベル7、闇属性、悪魔族
攻2700守2500

《冥府の使者カイエントークン》レベル7、光属性、天使族
攻1000守1000

（《ゴーズ》は攻撃力2700。今はどうしようも出来ないぜ…。）

「とりあえず、《海皇の長槍兵》で《カイエン》を攻撃！」

《長槍兵》の槍が《カイエン》に突き刺さる。五十嵐の場合は《ゴーズ》のみとなった。

「ターンエンド！」

遊真LP3600

手札0

《海皇の長槍兵》、《団結するレジスタンス》、羊トークン×2
伏せ1

（マズいな…。チビに来ていた流れをたった1枚のカードで変えやがった。流石はジュニアチャンプ。

…《ゴーズ》はきつと五十嵐のエースカードだ。チビの命運はコイツを倒せるかどうかにかかっているな…。）

「俺のターン！ドロー！手札1枚をコストに《閃光の双剣トリス》を《ゴーズ》に装備！攻撃力が500ポイント下がる代わりに、2度の攻撃を行う事が出来る！」

《ゴーズ》

攻2700 ↓ 2200

「バトルフェイズ！《ゴーズ》で《レジスタンス》、《長槍兵》を攻撃！」

2本の剣筋が走る。気づいた時には、遊真のモンスターは真っ二つに分かれていた。

遊真LP3600 ↓ 2400 ↓ 1600

「カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

五十嵐

LP1000

手札0

《ゴーズ》

《閃光の双剣トライス》

伏せ1

やはり、五十嵐は強いな、的確な戦術を選択している。このまま押し切るだろう。

いや、伴のあの引きの強さ、あれは天性のものだ。1枚のカードで逆転もあり得る。

…一体どっちが勝つんだ!?

二転三転のデュエルに、の生徒たちだけではなく、大勢の教師たちも引き寄せられてきた。

「先生達も来たか…、よっしゃ!燃えてきたぜ!オレのターン!」

遊真は勢いよくカードをドロースする。

(…き)

(きた！ひなたの貸してくれたカードが！)

「オレはカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

遊真の顔から笑みがこぼれる。

そして、自信を持ってリバーズカードをセットした。

「何をヘラヘラ笑っている！俺のターンだ！」

(この状況で余裕のあるあの顔…、その答えは《ゴーズ》を破壊するカードを引いた、だ。

…だが、オレの伏せカードは《ディストラクションジャマー》破壊

効果を無効にするカード。死角は無い。）

「バトルフェイズに移行！《ゴーズ》で羊トークン2体に攻撃！」

《ゴーズ》が剣を構え、攻撃を仕掛ける。

どんどん羊トークンとの距離が詰まっていく。

（さあ、発動しろ。貴様の希望のトラップカードを！）

…しかし、遊真に動きは無く、1回、2回と攻撃を受け、トークンは破壊された。

（なに！？…トラップじゃないだと！？）

《ゴーズ》の攻撃で、遊真のモンスターゾーンは空になった。それ

でも、何かをする動きは無い。

（あの笑顔で容易く攻撃を通した…？何か裏が…。

…いや、所詮はオシリスレッド、ここまで俺と善戦する事自体が奇跡だ。勝てないと悟り、ただ笑っているだけだろう…。）

五十嵐はゆっくり1つ息を吐くと、遊真に言った。

「長いデュエルも、ようやく次のターンで最後だ。
…せいぜい悪あがきするんだな！ターンエン…。」

「ちょっと待った！！
リバーズカード発動！《リミット・リバーズ》！」それまで何のアクションもおこさなかった遊真が動いた。

「《リミット・リバーズ》の効果で、墓地から攻撃力1000以下のモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する…。来い！《炎を操る者》！」

《炎を操る者》レベル3、炎属性、魔法使い族
攻900守1000

（このタイミングで発動したか…。

だが《リミット・リバーズ》で特殊召喚したモンスターは守備表示にするとは破壊される為、壁にはならず、たいした問題ではない…。
今、問題なのは…、）

「あれ？ひなたさん、遊真が使ったカード、前のターンに伏せたのじゃ無いね。

笑ってたからきつと逆転のカードだと思ったのに。」

遊真が使ったのは、五十嵐の警戒していたカードではなく、2ターン前から伏せてあったものだった。

「…海里くん。」

ひなたがポツリと言った。

「…遊真、ホントに勝っちゃうかも。」

小さな声のその言葉は周りの応援にかき消されてしまった。

「さあ、俺のターンは終了だ！さっさと進めろ！」

五十嵐

LP1000

《ゴーズ》

伏せ1

自分の敗北を危惧している五十嵐は、強い言葉で催促した。

しかし、遊真は…、

「焦るなよ、五十嵐。そんな難しい顔してちゃ、デュエルが楽しめねーぞ！」

遊真は笑って言う。

「黙れ！勝利を掴む喜びさえあれば、楽しむ事など不必要だ！」

五十嵐は振り払うようなしぐさをして、遊真の言葉を否定する。

「勝ったから”じゃないだろ、

デュエルを”楽しむから”勝った時は喜べるし、嬉しいんだ！

いくぜ！このカードにかける…、ドロー！…」

遊真の引いた運命のカード、

遊真はその1枚を発動した…。

「装備魔法、《下剋上の首飾り》を《炎を操る者》に装備！通常モンスターに装備して、装備モンスターが自身よりもレベルの高いモンスターと戦闘する場合…、その差×500ポイント攻撃力をアップする！」

「なんだとお！？」

「行け！《炎を操る者》！《ゴーズ》に攻撃！」

《炎を操る者》は全身に炎をまとして《ゴーズ》に突進した。

「レベルの差は4！よって攻撃力2000ポイントアップ！」《炎を操る者》

攻900 ↓ 2900

五十嵐

LP1000 ↓ 800

「くっ…！」

…だが、俺はまだ負けてはいない！まだLPは残っている！」

五十嵐は炎に包まれ、エースモンスターを失ったが、まだ諦めてはいない。

「お前…、予言したよな、五十嵐。」

…”次のターンで終わり”って、これで決着だ！」

（ひなた、オレに力を貸してくれ！）

「罨カード《未来王の予言》！魔法使い族のモンスターが相手モンスターを破壊した時、

…もう1度攻撃する事が出来る！」

《炎を操る者》が再び炎を生み出す。

「《炎を操る者》でダイレクトアタック！」
五十嵐

LP 800 ↓ 0

「勝者！チ…、伴遊真！」

堂林の勝者宣言と共に、五十嵐は崩れ落ち、地震のような大歓声がデュエル場に響き渡った…。

観客席の後方で、五十嵐一希の推薦者クロノス校長が、リング上で俯く五十嵐を見て静かに言った。

「やはり、シニョール五十嵐には、辛い結果になったノーネ。彼にとって、中等部入学以来の敗北、

…荒療治にはなっただけで、敗北を知る事で、大きく成長するのを期待してるノーネ…。」

もう一方では、海里・ひなたと喜び合う遊真がいた。

「そして、知識の乏しさとプロ顔負けのデュエルセンスをあわせもつ、”イレギュラーボーイ”、伴遊真…。」

…入学式の電話の話は本当になりそうなノーネ。元祖ドロップアウトボーイ…。」

第6話 イレギュラーボーイ（後書き）

あらすじ…、一応書きましたが下手すぎて前回までの話が全然分かりませんね。頑張って精進します。

デュエルが長くて2話に分かれちゃいました。

1話でまとめられる長さにした方が読みやすいんでしょうか…。

その辺、何か意見があつたらよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1823k/>

－真紅の魂－

2010年10月11日17時43分発行